

「児童心理学」講義受講による 大学生の養護性の変化

金丸 智美*

I. 問題と目的

1. 現代日本における養護性

前年の合計特殊出生率が過去最低となった1990年の1.57ショック以来、現在に至るまで、すべての子育て世代を支援する対策が実施されてきた。それにもかかわらず、合計特殊出生率は伸び悩み、少子化による人口減少は「国難」といわれるほどの大きな課題とされている。

少子化の理由の一つとして、晩婚化と非婚化の傾向が挙げられる。初婚年齢が男性31歳、女性29歳であり、生涯未婚率は男性23%、女性14%（国立社会保障・人口問題研究所、2017）と、調査時期を重ねるごとに上がり続けている。しかし、青年たちの多数は結婚を全く希望していないのではなく、機会があれば結婚をしたいと思っているのである。また、結婚の利点については、「子どもや家族をもてる」を選択する者の割合は年々高くなっており（国立社会保障・人口問題研究所、2015）、彼らが子どもや家族を持つことの価値を認めていることが伺われる。

現代の日本では、児童虐待の増加や、待機児童問題、育児と仕事との両立の困難さ、教育にかかる費用の多さなど、子育てに関して負の印象を醸成する情報に溢れている。このような状況の中、これから社会に出ていこうとする青年たちは、子どもを持つことの意義と、子育てを巡る負の印象との間に置かれ、自分のライフコースに子育てをどのように組み入れていけばよいのかと、宙づりになった状態に置かれているといえないだろうか。

少子化は既に1970年代半ばからはじまっていたため、現代では幼い子どもとの触れあいを体験しないまま親になる人が大多数であり、それが子育ての困難さにつながっているという指摘もある（原田、2007）。まして、現代の青年たちの中では、異年齢の子ども達と遊んだ経験や、乳幼児と触れ合う経験を持つ者は少数であろう。

子どもという小さく弱い存在に対して抱く、慈しみ、愛おしい、好きであるという感情

*総合福祉学部 准教授

は、これから子育てを行う可能性のある青年たちにとって重要であるとされる(中西・牧野, 1989)。このような感情は、実際に乳幼児と触れ合う機会を持つことによって増すことが多くの研究で示されている(例えば, 山田, 1995; 礪波, 2012; 佐々木, 2007)。大学生については、ボランティアやアルバイト, あるいは実習において、乳幼児と関わる機会を持つ者も多い。しかし、このような機会を持つという動機の前提として、既に子どもへの関心や好感情が高いことも想定される。実際に乳幼児とかかわることを経験しなくても、乳幼児や児童がどのような発達の道筋をたどるのか、また、子どもを育てるということはどのようなものであるかを、知識として理解することによっても、子どもへの関心や好感情は高くなる可能性があると考えられる。

心理学、教育学や看護学の領域では、子どもへの関心や好感情を、「養護性」「親性準備性」「次世代育成性」という概念で表現してきた。本稿では、これら概念に関する先行研究について、性差や乳幼児とのかかわり経験の有無などの関連要因や、保育学習体験や実習などの活動の効果を中心に概観し、この領域における今後の研究課題について検討する。

さらに、筆者が淑徳大学総合福祉学部で担当する講義科目「児童心理学」の受講生を対象に受講開始時と受講後の2回、養護性に関する質問紙を実施することで、受講前の段階における受講生の養護性の現状を把握し、同時に、講義を受講したことの「養護性」への影響を明らかにする。それをもとに、講義実施における今後の課題を検討する。

2. 養護性および関連する概念の定義

まず「養護性 (nurturance)」については、Fogel, Melson, & Mistry (1986) の理論をもとに、小嶋 (1989) が「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義している。小嶋 (1989) によれば、養護性を、大人になってはじめて発揮されるものではなく、子ども時代から人や生き物の世話などの経験を通して形成されるという、生涯発達の視点から捉えることが重要である。従って、養護性を発揮する主体には、親などの大人だけでなく、幼児や児童も含まれる。また、養護性が向けられるものも、幼い子ども以外に、一時的に有能性を失っている大人や、人間以外の生き物や植物など、さまざまな対象が含まれる。また、養護性は、対象への肯定的な関心や感情および対象を慈しみ育てようとする動機という養護的な構えと、養護的行動を為し得る技能という2つの要素から構成される(小嶋, 1989)。

養護性と重なる概念に向社会的行動がある。両者とも自発的になされる利他的行為ではあるが、向社会的行動には、相手を慈しみ育てるという視点はないのに対し、養護性ではこの視点が重視されるという違いがある(小嶋, 1989)。つまり養護性は、相手を育てようとする点や、自分より弱い立場にある者を保護する点が特徴となる(榎澤, 2012)。榎澤ら

(2009)は、養護性を測定するものとして、「幼い子どもに対する共感性」「幼い子どもに対する技能の認知」「親への準備性」「子どもの非受容性」の4因子から構成される尺度を作成している。

次に「親（性）準備性」については、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質であり、「情緒的、態度的、知的に親としての役割を果たすための十分なレディネス」や「心理的・行動的・身体的に育児行動を行うために必要な資質を形成していく、あるいは形成された状態」などと定義されてきた（岡本・古賀，2004）。それに対して、岡本・古賀（2004）は、これらの定義は養育役割に限定しすぎており、子育て以外にも、家庭を支え経営していく存在としてのモデルを示すという視点が欠けているとし、「子どもが将来、家庭を築き経営していくために必要な、子どもの養育、家族の結合、家事労働、介護を含む親としての資質、およびそれが備わった状態」と定義している。

一方、「親（性）準備性」について伊藤（2004）は「親性」と「（親になるための）準備性」とに分け、それぞれの概念を整理する中で、両者とも、伝統的母性観からの脱却を目指した研究動向の中で生み出された用語であると指摘している。その上で、「親性」を「次世代の再生産と育成のための資質」とし、親役割を超えた次世代の再生産と育成を支援する社会の一員として備えるべき資質としている。この「親性」の形成過程において段階的に形成される資質を「親性準備性」としている。

この伊藤（2004）の定義は、原・館（1991）が、従来の「母性」概念への問い直しから出発して提唱した「次世代育成力」と重なる部分が多いといえるであろう。原・館（1991）がこの言葉に込めたのは、男性対女性という対立や、家族という枠を超えた人と人とのつながりの中で、「共に尊重し合いながら生き、死んでいこう、そして次世代へものごとを引き継いでいこう」という願いであるという。ここで次世代へ引き継ぐものとしては、子育てだけでなく、例えば学校のクラブ活動や地域の団体活動の中で、運営のノウハウを新しいメンバーや下の学年に継承していくことも含むとされる。

以上、「養護性」「親（性）準備性」「次世代育成力」の定義を整理した。全てに共通することは、自分以外の存在に対する肯定的な関心や感情を基底とし、そこから、相手の健全な育成を願い、そのために自身の心身のエネルギーを注ごうとする資質といえよう。その中でも、特に「養護性」では、幼い頃から徐々に発達し育む心性と行動であり、それが大人になった際に他者の健全な発達のために共感的な気持ちと技能として発揮されるという、生涯発達の考え方が強調されている。また、向けられる対象は次世代に限定せず、さまざまな対象を含む点でも、包括的な概念であると考えられる。以下の先行研究の概観では、「養護性」「親（性）準備性」「次世代育成性」をキーワードとする研究を対象とするが、本稿ではこれら類似した概念を代表するものとして「養護性」という用語を使用する。

3. 養護性に関連する要因 (1) —性差—

養護性の形成に関わる要因の一つとして、多くの研究で性差が取り上げられ検討されている。青年期にある大学生を対象とした研究が多数であり、そのほとんどで女子のほうが男子よりも養護性や親性準備性が高いことが示されている。しかし、養護性や親性準備性を測定する下位尺度ごとにみると、一部には全ての下位尺度において女子が男子よりも高いことを示す研究(棚澤ら, 2009)があるものの、多くは、全ての下位尺度において女子のほうが男子よりも高いという結果は示されていない。ほとんどの研究で女子が男子よりも高いという結果が示されているのは、「乳幼児への好感情」「育児イメージ」「乳幼児への関心」など、乳幼児に対する肯定的な感情や共感を表す下位尺度においてである(川瀬, 2010; 佐々木, 2007; 寺本・柴原, 2015; 礪波, 2012)。これらの研究では「育児への積極性」や「育児の自信」においては、男女で有意な差異は示されていない。これは、育児への積極性や自信は、経験によって形成される傾向が強く、現代では男女に関わりなく、乳幼児とかかわる機会を持たないまま育つ者が大多数である現実を示していると考えられる。一方で、乳幼児に対する肯定的な感情が女子のほうが高いという点は、男女平等が謳われる現代であっても、女性は男性よりも、育児を行うことが期待されやすいという、社会・文化的価値観の影響が想定される。

棚澤(2012)は、幼児の養護性の性差に関しては、性差はほとんどないとする研究もあるが、年齢があがるにつれ性差は大きくなっていく傾向があるとしている。その中で、Fogel & Melson (1989) の、男子は子どもの世話の責任から注意をそらすように促され、女子はその責任に注意を向けるように励まされるのだという指摘を引用している。日本では、幼児や児童の養護性に関する研究は非常に少ないが、その中で小嶋(1989)は、保護者への質問紙によって、幼児と児童の養護性を調査した結果、年下の子どもに向けた養護行動には性差はなく、その頻度は年齢とともに減少すること、一方でペットを中心とした生き物への養護行動が年齢とともに増加し、それは特に女子に顕著であることを示している。青年期の女子が男子よりも、乳幼児への肯定的な感情が高いということが、幼児期以降の成長過程の中でどのように形成されていくのか、今後の研究が求められる。

4. 養護性に関連する要因 (2) —乳幼児とのふれあい経験の有無—

養護性が幼少期からの経験の中で形成されるものとするれば、成長過程での経験の内容や質によって、養護性の程度は異なることが想定される。その一つとして、乳幼児の世話や遊びなどのふれあい経験に焦点が当てられている。

女子中学生・高校生・大学生を対象にした親準備性に関する研究(山田, 1995)の中で、どの年齢層においても、過去の乳幼児の世話体験が多い者のほうが、少ない者よりも親準備

性は高いことが示されている。同様に岡本・古賀（2004）は、青年期の親準備性の高い群が低い群よりも、過去の学習体験、子どもの世話、ボランティア体験の全てについて多く持っていることを示すことで、乳幼児とのふれあいや学習以外に、高齢者についての学びやボランティア体験も、親準備性を高めることに有効であると指摘している。

大学生を対象に、養護性や親準備性の下位尺度ごとに分析をしている研究の中で、礪波（2012）や佐々木（2007）は、「子どもへの好感情」「育児への積極性」「技能」も含む多くの下位尺度において、乳幼児とのふれあい経験が多い者のほうが少ない者よりも高い得点であることを示している。一方で、川瀬（2010）は職場体験やボランティア経験などで子どもと関わる経験が多い大学生は、少ない大学生よりも「子どもへの好感情」「親になるイメージ」では高いが、「育児への積極性」は両者に差異がなかった結果について、実際に子どもに触れ、現場を知ることによって現実の困難さを意識したためではないかと解釈している。

乳幼児とのふれあい経験の有無が性別によって異なる影響を及ぼすことを示す研究もある。中西・栗津（1996）は、女子では乳幼児とのふれあい経験の有無によって養護性の程度に差異はない一方で、男子ではふれあい経験がある群のほうが、ない群よりも「子どもへの興味」「育児への自信」において得点が高いことを示している。

年下のきょうだいの存在は、日常生活で年少の子どもと触れ合う機会となるため、養護性や親準備性に影響を及ぼすことが想定される。水口・中新・井上（2017）は、青年期大学生を対象とした研究の中で、弟・妹のいる人のほうが、いない人よりも親準備性が高いことを明らかにしている。さらに、弟・妹のいない人のほうが、過去に受けた「親になることについての」授業などの教育の記憶が強く残っていることも示し、親準備性を育む教育の重要性を指摘している。

以上から、乳幼児とのふれあい経験を持つことが養護性を高くするといえる。特に子どもへの肯定的な感情や共感については、ほとんど全ての研究でふれあい経験が多い人のほうが少ない人よりも高いことが示されている。しかし、必ずしも全ての養護性の下位概念が高まるわけではないことも示されているように、ふれあいの内容や程度、質などによっても、その影響は異なるといえるであろう。一方で、男子や、弟・妹を持たない人たちなど、もともと養護性が低い傾向にある人たちに対しては、実際に乳幼児と触れ合ったり、親になることを学ぶ機会を提供することの効果は大きいといえるであろう。

5. 養護性に関連する要因（3） —被養育経験—

養護性の差異に関して、愛着（アタッチメント）理論に基づき、子ども時代の親との関係性の違いから説明する立場もある。

岩治・井森（2008）は、女子大学生の生育史をもとに、乳幼児期から大学生における親と

の関係性を明らかにし、各時期の親との関係と現在の養護性との関連性を検討している。その結果、乳幼児期や小学生期において親との良好な関係を構築した人は、親に対するポジティブで安定したイメージを持ち、さらには養護性も高いことを示している。岩治(2009)は他の研究においても、現在および過去の安定的な親との愛着関係は、養護性に対してポジティブで安定したイメージを提供し、アンビバレント的愛着関係と回避的愛着関係は、逆に養護性に対してネガティブで不安定なイメージを提供していることを明らかにしている。

このように、養護性や親準備性に影響を及ぼすものとして、幼少期からの親との関係が重要とされているが、一方では就学前の幼児期の親との関係よりも、成人期の愛着スタイルのほうが、親準備性の複数の側面により強く影響していることを示す研究もある(小池, 2013)。さらには、榎澤ら(2009)はきょうだいの地位や性別によって、影響を受ける人や体験が異なることを示している。例えば、母親からの被養護体験は、女子で弟妹がいる人では、養護性の「共感性」に、女子で兄姉がいる人では「準備性」に影響をしていた。しかし同じ母親からの被養護体験でも、男子では弟妹がいる人では養護性への影響はなく、兄姉がいる人では「共感性」に負の影響をしていたというように、母親のかかわりの養護性への影響も、性別やきょうだいの地位によって異なっていた。この研究では、教師やきょうだいからの被養護体験についても検討している。その中で教師からの被養護体験については、男子では養護性への影響は見られないのに対して、女子では大きな影響を受けていた。

養護性や親準備性は、幼少期から受けてきた親からの養育体験をもとに形成されることは否定できないものの、小池(2013)や榎澤ら(2009)の研究からは、幼少期以降に出会う、親以外のさまざまな人のかかわりによっても影響されうるといえるであろう。

6. 養護性育成を目指した活動の効果

子どもや青少年に対して、乳幼児など多様な他者と接する機会の少なさを補完するため、意図的にそのような機会を提供することで、養護性の育成を目指す取り組みが学校や地域においてなされている。これらの取り組みの対象者としては、中学生・高校生・大学生が中心であり、取り組み方は、総合的な学習や家庭科での保育体験学習、あるいは大学での演習や実習として実施されているものが多いが、中には大学が地域貢献活動の一環として実施しているものもある。複数の研究の中で、これら活動の養護性や親準備性に対する効果が検討されている。

中学一年生を対象にした研究(佐藤, 2004)で、乳幼児とのふれあい体験学習後に、乳幼児に対するイメージが、「弱く無力である」というものから、「たくましく、能力をもった存在である」というものに変化し、親の育児責任を認識するようになったことが示されている。さらに、体験学習より前に、すでに乳幼児とのふれあい経験が多かった群と、少なかつ

た群とを比較すると、少なかった群において、上記の変化がより大きかったことも明らかにされている。

乳幼児とのふれあい学習の方法としては、地域の保育園や幼稚園で生徒や学生が一定時間を過ごし、乳幼児や保育者とかかわるという活動が多い中、伊藤・塚本（2015）は、「赤ちゃん人形プログラム」を実施している。このプログラムは、赤ちゃん人形の世話の中で、自分なりに赤ちゃんのイメージを膨らませ、多様な役割を引き出していく特徴があるとされる。伊藤・塚本（2015）は、中・高校生を対象に、実際の乳幼児とのふれあい体験学習と、赤ちゃん人形プログラムの両方を実施し、2つのプログラムの相乗的効果を比較、検討した。その結果、「赤ちゃん人形プログラム」は、そのイメージング作用によって、学習者に「幼い命を大切にしたい・守りたい・育みたいという感情」を高めるのに対して、「赤ちゃんふれあい体験」にはそのような効果がみられにくかったと指摘している。また、両者とも「乳幼児の養育に必要な具体的行為・技能」の獲得にはつながらなかった点は、今後の工夫が必要だとしている。

将来子育てに必要な特性を育てるというだけでなく、生徒の発達課題や学校生活、さらには地域との関係性などの向上を目指す包括的な取り組みとして、保育や子育てに関するプログラムを捉える視点が必要（藤後，2007）との指摘もみられる。藤後（2007）は、中学3年生を対象に、子どもの遊びなどの講義と保育園でのふれあい体験を含む発達教育プログラムを実施した結果、プログラム実施前に「大人関係」「友人関係」「地域関係」が低かった群において、それぞれの下位尺度得点が向上したことを示している。さらに、保育士が直接中学生へ関心やケアを与えるというメンター機能が、中学生の学校での大人関係、友人関係にポジティブな影響を与えていること、子どもポジティブ刺激（例：「子どもと一緒に思いっきり遊んだ」「子どもから声をかけてきた」）が、中学生の友人関係や地域関係にポジティブな影響を与えていることを明らかにしている。これらの結果から、中学生が乳幼児について学び、保育園で乳幼児や保育士とかかわり合いながら一定時間を過ごすことは、子育てに関わる側面を育てるだけでなく、中学生の生活において重要な対人関係や地域との関係性を広げるといふ、人格的成長全般に関わる側面においても意義があることがわかる。

大学生を対象とした試みとして、贅・中川（2016）が、母性看護学実習後の学生達における親準備性の変化を検討した研究を挙げる。2週間の病棟実習後に、「乳幼児への好感情」「育児への積極性」「育児への自信」「親になるイメージ」の下位尺度得点が向上したことが示されている。しかし、質問項目ごとに変化をみた場合には、「育児をしていると、自分の好きなことができないと思う」「育児をしている親は疲れてみすばらしく見える」「自分は育児をすることには自信がない」では実習後に得点が増えていることから、実習をすることによって、出産や子育ての大変さも体験するため、育児の一部に対するマイナスのイメージが

強くなることがわかる。賛(2016)が述べているように、実習においては、対象者に十分なケアが提供できない困惑感などによって、育児への否定的な感情が生じやすいため、このような否定的な感情に対して、教員がきめ細かな対応をすることが望まれる。

II. 方法

1. 淑徳大学総合福祉学部での講義科目「児童心理学」の概要

筆者が担当する「児童心理学」は、前期に開講される講義科目である。実践心理学科および社会福祉学科の2年生以上を対象とし、認定心理士、福祉心理士、スクールソーシャルワーカー受験資格取得時の選択科目でもある。受講者数は、平成30年度は143名であった。

授業目的は、乳児期から小学生までを「児童期」とし、生涯発達における児童期の位置づけ、および心身の発達の道筋を理解することと、児童期を取り巻く環境の現状を学び、今後の子育ち・子育てに何が必要であるかを考える機会とすることである。その中で、自分自身の子ども時代の心身の発達や他者との関係を振り返ることで、自己理解を深めることも目指している。

講義内容は以下のとおりである。

第1回：生涯発達の中での児童期の位置づけ、および発達段階や発達領域についての概説および講義全体のガイダンス。

第2回：乳幼児の子どもの生活や育つ環境(家庭・地域・遊び・メディア)の現状。

第3回：小学生の生活や育つ環境(家庭・地域・遊び・メディア)の現状。

第4回～第12回：運動・認知・感情・対人関係という各発達領域の発達の道筋や特徴、子どもにとっての遊びの意味。

第13回：現代日本での子育ての現状、親になることの意味や、虐待などの臨床的問題。

第14回：いじめ、不登校を中心とした小学生の臨床的問題。

第15回：講義内容の理解度を確認するための筆答試験と、全体の振り返り。

講義方法は、パワーポイントを使用した内容説明を主とし、併せて、各種調査結果資料や新聞などの報道記事、子どもの発達を説明した教材ビデオを使用しながら解説した。毎回の講義終了時にリアクションペーパーの提出を求め、次回の講義内容に入る前に、数名の感想や質問を選び、解説するなどのコメントを行った。

2. 養護性に関する質問紙調査

(1) 1回目調査

①実施時期：平成30年4月9日。第1回目の講義終了前に、受講生の現時点での乳幼児と育児に対する印象を調べ、その結果を本講義の参考にするために実施することへの協力を求

めた。

②質問紙の構成

小池（2009）が作成した「親性準備性尺度」の一部を使用した。本尺度を選択した理由は、他の尺度の中には、自身の養育者への感情を含むものもある（例えば、岩治，2009）中で、比較的心理的な侵襲性の低いものと判断したためである。小池（2009）の「親性準備性尺度」は、「子どもと育児への好意」（13項目）、「育児への負担感」（8項目）、「生きがい」（4項目）、「自己成長」（3項目）の4つの下位尺度から構成される。授業内での実施ゆえの時間的制約を考慮して、各下位尺度項目の中から因子負荷量の大きな項目を選び、全部で15項目とした。

フェイス項目としては、性別、学科、学年を設定した。また、先行研究の中で「養護性」に関連すると要因として挙げられていた、過去の乳幼児とのふれあい経験に関する項目として、「5歳以上年の離れた弟妹の有無」（1. いる 2. いない）、「身近の、小学生になる前の子どもの有無」（1. いる 2. いない）、「小学生になる前の子ども（乳幼児）と遊んだ経験の有無」（1. よくある 2. 一度または数回ある 3. 経験はない）を設定した。

第2回の講義の冒頭で、調査結果の概要についてパワーポイントを使用して説明した。

（2）2回目調査

実施時期：平成30年7月16日。第14回目の講義終了前に、受講生の本講義受講後の乳幼児と育児に対する印象を調べるために実施することへの協力を求めた。質問項目は、乳幼児とのふれあい経験を問う3つの項目を省いた以外は、1回目調査時と同様のものを使用した。第15回の全体の振り返りの中で、調査結果の概要を口頭で説明した。

3. 倫理的配慮

第1回目、第2回目調査とも無記名で実施し、調査への協力は任意であること、得られた結果は統計的に処理するため個人は特定されないことを事前に説明した。

Ⅲ. 結果

1. 1回目調査

（1）養護性（親性準備性）尺度の因子構造の検討

有効回答数は119であった。回答者の内訳は男性が43名、女性が76名、実践心理学科が86名、社会福祉学科が33名であった。乳幼児とのかかわりを問う項目への回答者数の内訳を表1に示す。養護性（親性準備性）の15の質問項目について因子構造を検討するため、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。原版の尺度は4因子のため、本分析でも4つの因子を想定した。その結果、表2のとおり、4因子に分かれることが示された。項目内容

表1 乳幼児とのかかわりの程度に関する項目への回答者数

	いる	いない	
5歳以上年の離れた弟妹	30	89	
身近の、小学生になる前の子どもの有無	21	98	
	よくある	一度または 数回ある	経験ない
小学生になる前の子どもと遊んだ経験	39	65	14

表2 親性準備性(養護性)尺度の因子分析(最尤法・プロマックス回転)結果(n=119)

第1因子：子どもと育児への好意	I	II	III	IV
私は、小さい子どもが好きだ	.99	-.07	.05	-.05
私は、小さい子どもと遊ぶのが好きだ	.93	.10	.05	-.09
私は、小さい子どもを見るとほほえんだり、興味を示したりする	.77	-.03	.09	.21
私は、小さい子どもの世話をすることが好きだ	.69	.22	-.07	.00
私は、小さい子どもと関わることは自分に向かないと思う(逆転)	.58	-.13	-.33	.06
第2因子：生きがい				
私は、自分にとって育児は生きがいであると思う	.07	.75	-.01	.08
私は、自分にとって何よりも大切なのは育児であると思う	.03	.72	.15	-.14
私は、育児は素晴らしい仕事だと思う	-.15	.59	-.21	.18
私は、将来自分の子どもに対して自分がしてやることを考えると、気持ちがはずむ	.26	.45	-.04	.11
第3因子：育児への負担感				
私は、小さい子どもの相手をするにはわずらわしいと思う	-.05	.23	.75	-.18
私は、育児をすることは面倒だと思う	.09	-.13	.57	-.08
私は、育児によって自分の行動が制限されると思う	-.11	-.13	.56	.36
私は、育児は自分の人生の多くの部分を奪うと思う	.07	-.01	.50	.15
第4因子：自己成長				
私は、育児を通して自分も成長できると思う	.01	.07	.08	.87
私は、育児によって新しい人生観、価値観を得ると思う	.05	-.03	.08	.60
因子間相関		II	III	IV
I		.63	-.58	.47
II			-.29	.46
III				-.29

から、原版の尺度と同様に第1因子を「子どもと育児への好意」(5項目)、第2因子を「生きがい」(4項目)、第3因子を「育児への負担感」(4項目)、第4因子を「自己成長」(2項目)とした。信頼性係数は、尺度全体では $\alpha = .75$ 、第1因子は $\alpha = .93$ 、第2因子は

表3 第1回目調査 親性準備性(養護性) 下位尺度得点の平均値(標準偏差): 性差および学科差

	全体	性別		学科	
	(n = 119)	男性 (n = 43)	女性 (n = 76)	実践心理 (n = 86)	社会福祉 (n = 33)
子どもと育児への好意	3.60 (.92)	3.58 (.91)	3.62 (.94)	3.44 (.94)	4.01 (.75)**
生きがい	3.32 (.71)	3.37 (.70)	3.30 (.80)	3.21 (.78)	3.61 (.66)**
育児への負担感	2.97 (.70)	2.90 (.77)	3.02 (.66)	3.08 (.69)	2.70 (.68)**
自己成長	4.20 (.53)	4.21 (.55)	4.27 (.53)	4.24 (.54)	4.27 (.53)

** $p < .01$

= .78, 第3因子は $a = .67$, 第4因子は $a = .70$ であった。各因子に含まれる項目の合計点を項目数で除した平均値を下位尺度得点として算出した。

(2) 養護性の性別・学科, および乳幼児とのふれあい経験による差異の検討

性別や学科, および乳幼児とのふれあい経験の程度によって, 養護性に差異がみられるかを検討するため, 養護性の各下位尺度を従属変数にしたt検定および一元配置分散分析を行った。その結果, 性別については, 全ての下位尺度において有意な差異はなかった。学科については, 社会福祉学科が実践心理学科よりも第1因子「子どもと育児への好意」($t(117) = -3.11, p < .01, d = .64$), 第2因子「生きがい」($t(116) = -2.64, p < .01, d = .54$)において有意に高く, 第3因子「育児への負担感」において有意に低かった ($t(116) = 2.67, p < .01, d = .55$) (表3)。

乳幼児とのふれあい経験については, 「5歳以上年の離れた弟妹の有無」については第2因子「生きがい」において有意傾向で, 「2. いない」ほうが「1. いる」よりも高かった ($t(116) = -1.19, p < .10, d = .37$)。「身近の小学生になる前の子どもの有無」については, 第1因子「子どもと育児への好意」において「1. いる」のほうが「2. いない」よりも有意に高かった ($t(51) = 2.83, p < .01, d = .48$)。「小学生になる前の子どもと遊んだ経験」については, 第1因子「子どもと育児への好意」において有意な差異があった ($F(2, 115) = 3.17, p < .05, \eta^2 = .05$)。さらにTukey法の多重比較を行ったところ, 「1. よくある」が「2. 一度または数回ある」よりも有意傾向 ($p < .10, d = .46$) で高かった (表4)。

2. 2回目調査

有効回答数は108であった。回答者の内訳は男性が46名, 女性が62名, 実践心理学科が78名, 社会福祉学科が30名であった。養護性(親性準備性)尺度については, 1回目調査と同様, 4つの下位尺度得点を算出した。

性別および学科によって, 養護性に差異がみられるかを検討するため, 養護性の各下位尺度を従属変数にしたt検定を行った。その結果, 女性のほうが男性よりも, 第1因子「子ど

表4 親性準備性(養護性) 下位尺度得点の平均値(標準偏差):乳幼児とのふれあい経験による差異

	5歳以上年の離れた 弟妹の有無		身近の、小学生になる 前の子どもの有無		小学生になる前の 子どもと遊んだ経験			多重比較
	1. いる	2. いない	1. いる	2. いない	1. よくある	2. 一度または数回	3. ない	
子どもと育児への好意	3.57 (1.08)	3.61 (.87)	3.96 (.55)	3.52 (.97)**	3.89 (.91)	3.48 (.89)	3.34 (.94)	1 > 2 ⁺
生きがい	3.11 (.72)	3.39 (.77)*	3.43 (.69)	3.30 (.78)	3.50 (.68)	3.27 (.75)	3.34 (.84)	n.s.
育児への負担感	2.90 (.69)	3.00 (.71)	2.90 (.54)	2.99 (.73)	2.88 (.61)	2.96 (.73)	3.27 (.81)	n.s.
自己成長	4.17 (.50)	4.28 (.54)	4.29 (.46)	4.24 (.55)	4.27 (.48)	4.26 (.55)	4.14 (.60)	n.s.

⁺p < .10 **p < .01

もと育児への好意」において有意傾向で ($t(84) = -1.70, p < .10, d = .35$), 第4因子「自己成長」において有意に ($t(78) = -2.05, p < .05, d = .43$) 高かった。学科については全ての下位尺度において有意な差異はなかった(表5)。

3. 1回目調査と2回目調査の結果比較

1回目調査と2回目調査とを比較し、養護性においてどのような変化がみられたかを検討するため、各下位尺度を従属変数としたt検定を実施した。

その結果、第3因子「育児への負担感」において、2回目のほうが1回目よりも有意に高かった ($t(224) = -2.60, p < .01, d = .35$)。

性別ごとに、1回目調査と2回目調査との比較を行ったところ、男性で第3因子「育児への負担感」において、2回目のほうが1回目よりも有意に高かった ($t(87) = -2.68, p < .01, d = .57$)。女性では有意な差異はなかった(表6)。

IV. 考察

1. 受講前の養護性

「児童心理学」を受講する前の段階における、受講生の養護性について検討するために4月に実施した1回目調査の結果では、性別による養護性の有意な差異はなかった。これは多

表5 第2回目調査 親性準備性(養護性) 下位尺度得点の平均値(標準偏差):性差および学科差

	全体	性別		学科	
	(n = 108)	男性 (n = 46)	女性 (n = 62)	実践心理 (n = 78)	社会福祉 (n = 30)
子どもと育児への好意	3.50 (.93)	3.32 (1.03)	3.64 (.82) ⁺	3.44 (.88)	3.66 (1.02)
生きがい	3.23 (.75)	3.15 (.79)	3.30 (.72)	3.19 (.71)	3.35 (.86)
育児への負担感	3.21 (.66)	3.33 (.74)	3.13 (.58)	3.21 (.62)	3.20 (.76)
自己成長	4.31 (.62)	4.16 (.72)	4.42 (.52)*	4.35 (.58)	4.20 (.71)

⁺p < .10 *p < .05

表6 親性準備性（養護性）下位尺度得点の1回目調査と2回目調査の比較

	1回目 全体 (n=119)	2回目 全体 (n=108)	男性		女性	
			1回目 (n=43)	2回目 (n=46)	1回目 (n=76)	2回目 (n=62)
子どもと育児への好意	3.60 (.92)	3.50 (.93)	3.58 (.91)	3.32 (1.03)	3.62 (.94)	3.64 (.82)
生きがい	3.32 (.71)	3.23 (.75)	3.37 (.70)	3.15 (.79)	3.30 (.80)	3.30 (.72)
育児への負担感	2.97 (.70)	3.21 (.66)**	2.90 (.77)	3.33 (.74)**	3.02 (.66)	3.13 (.58)
自己成長	4.20 (.53)	4.31 (.62)	4.21 (.55)	4.16 (.72)	4.27 (.53)	4.42 (.52)

** $p < .01$

くの先行研究において示されてきた、女性のほうが男性よりも高いという結果とは異なるものである。その一方で、社会福祉学科の受講生のほうが実践心理学科の受講生よりも、養護性の「子どもと育児への好意」および「生きがい」で高く、「育児への負担感」で低いという、学科による有意な差異がみられた。この点については、各学科に所属する学生の関心や進路の違いが影響している可能性がある。社会福祉学科では、本科目はスクールソーシャルワーカーの資格試験に必要な選択科目として設定されていることから、児童を対象とした社会福祉士を目指している学生が多いと想定される。そのため乳幼児や児童を含む子ども全般や子どもを育てることに對して関心が高く、肯定的な感情を抱いている傾向であったと考えられる。それに対して実践心理学科では、本科目は認定心理士資格のために必要な選択科目ではあるが、認定心理士自体が子どもに限定した資格ではなく、受講生の進路も、一般企業を含む広い業種が想定され、必ずしも児童関連の施設や団体へ就職を希望しているとは限らないのが現状である。したがって実践心理学科の受講生は社会福祉学科の受講生よりも、もともと子どもや育児への肯定的な関心や感情という側面で養護性が低かった可能性が考えられる。

中西・栗津(1996)が、幼稚園教諭や保育士、あるいは養護教諭をめざす専攻の大学生のほうが、英語や情報科学などを専攻する大学生よりも養護性が高いという専攻による差異を示しているのと同様に、受講前の段階の第1回目調査では、性差よりも学科による養護性の差異が顕著であったといえる。

第1回目調査では、過去の乳幼児とのふれあい経験については、幼い子どもが身近にいる人や、一緒に遊んだ経験を多く持つ人のほうが、そうではない人よりも、「子どもや育児への好意」得点が有意に高いことが示された。この結果は、複数の先行研究の結果と一致するものであった。特に、本調査でも先行研究と同様に、乳幼児と触れ合う経験の多い人のほうが少ない人よりも得点が高いのが、「負担感」や「自己成長」などの育児に実際に関わる中で実感する側面ではなく、子どもや育児への肯定的な感情という感情的側面であることが示された。一方「5歳以上年の離れた弟妹」がいる人のほうが、いない人よりも「生きがい」

得点が低い傾向があった結果は、水口ら(2017)の研究結果とは異なるものであった。この解釈としては、実際に日々年齢の離れた幼いきょうだいと過ごして行く中で、親のかかわりを間近に見たり、自分自身でも日常的な世話などを行ったりすることで、人生の中で育児が全てではないという現実を感じているのではないかと想定される。つまり年が離れたきょうだいがいる人は、いない人よりも育児の現実を知っていると考えられるかもしれない。

2. 受講後の養護性

講義の受講後における、受講生の養護性を検討するために7月に実施した2回目調査の結果、学科による差異はみられず、女性のほうが男性よりも、「子どもと育児への好意」および「自己成長」において高いという性別による差異がみられた。また、1回目よりも2回目調査のほうが、「育児への負担感」が高く、それは男性において顕著であった。

本講義では、乳幼児期と児童期の発達の道筋について学ぶことを目的に進める中で、具体的な子ども達の様子や現実の子育ての理解を深めるために、乳幼児の発達や遊びに関する映像や、子どもや子育てに関する各種調査資料や報道資料を使用した。また、第13回目の講義では、子育てについて、子育てが肯定的側面と否定的側面の両義性を含むことや、子育て不安や虐待の生じる要因などについて説明を行った。子育て不安に関しては、現代では地域でのつながりの弱さを補うように、地域自治体が提供する子育て支援施策としての場やプログラムがあること、また、父親と母親が協力しながら子育てを行うことによって母親の不安感や負担感が少なくなることも言及した。

講義の中で、このような子どもが育つ道筋や、子育てに関してさまざまな側面に目を向け、考える機会を持つことによって、上記のような性別による差異が現れたのではないかと考えられる。つまり、受講生それぞれが、自分が親の立場になった時の子どもへの対応や感情を想定しながら2回目の質問紙へ回答したのではないだろうか。男性については、将来子どもを持ったとき、妻をサポートしながら家族を養っていくことの重圧や責任感を強く感じるようになった可能性もある。一方、女性においては、過去の幼い子どもとの触れ合い経験が少ないとしても、夫の協力や、さまざまな子育て支援の資源を使いながら、子育てを行うことができるという思いとなったのではないだろうか。そのため、子どもや育児への肯定的な感情や、育児によって成長できるという考えが、男性よりも強くなったと考えられる。

このように、受講前には、子どもや子育てへの肯定的感情という養護性において、希望する進路に起因した学科による差異であったが、本講義を受講することによって2回目調査時には、男女とも、自身が将来子育てを行うことを想定した養護性となったことで、性別による差異が現れたと考えられる。

V. 今後の課題

養護性は、大人になって初めて発揮されるものではなく、幼児期から児童期、青年期を経る中で、さまざまな人やものに関わりながら形成される。日本での養護性に関する研究は、青年期や成人期に焦点を当てたものがほとんどであり、幼児期や児童期を対象としたものは非常に少ない。幼児期あるいは児童期から見られる養護性の性差が、その後どのように変化するかを研究することによって、青年期や成人期における性差への、親の関わりや学校教育などを含めた社会・文化的要因の影響を明らかにすることができるであろう。また、育児における男性の関与が求められる現在、特に成人男性の養護性に焦点を当てた研究も今後一層必要となると考えられる。

本調査の結果、児童心理学の講義を受講後に「育児への負担感」が増えたことが示された。このように、子どもや育児について学ぶことによって、むしろ養護性が低くなるということは、川瀬（2010）や賛・中川（2016）が指摘しているように、現実の子どもや育児の大変さに接することの影響であると考えられる。

子どもを育てることをテーマとした講義は、第13回の1コマのみであったにもかかわらず、最終筆答試験での、「最も理解が深まったテーマと内容」を記述する問題に対して、「子育てについて」とする回答が過半数を超えていた。その記述には、子育てが肯定的側面と否定的側面の両義性を含むことや、親になった際には、子どもの要求や感情に応答的でありたいこと、そのためには自身の感情を調整する必要があること、子育ての悩みを一人で抱えるのではなくさまざまな人や施設の支援をもらうことが必要であることなどが含まれていた。このように、児童心理学の講義を受講することによって、育児に対しての負担感という感情は増えたが、自分自身のこととして子どもや育児を考えるようになったといえる。

一方、受講後に育児への負担感が高くなったことには、本講義の中で扱った子育てに関する説明が、育児不安や虐待など、子育ての否定的な側面が中心であったことの影響も想定される。子育ての否定的な側面だけではなく、育児をすることの喜びや、親になることによる視野の広がりなどの人間的成長や、子どもという存在の肯定的な側面についても併せて扱う必要があったであろう。また、子育ての否定的な側面について考える場合にも、多様な考え方を受講生同士で交換する中で、受講生自身の内面で咀嚼され昇華される機会となるであろう。したがって、受講生で議論し合う機会を設定する必要もある。

さまざまな要因によって、結婚や子育てが当然のものではなくなり、価値観の違いによる分断が進む現代社会において、養護性は、親としての養護性を超え、多様な他者やものへの配慮や理解という、人間性の幅を広げる可能性を備える資質として育む意義を持つ。「児童心理学」科目の本来の到達目標ではないものの、第二の目標として、受講生の養護性を育成することも目指して講義の在り方を今後さらに工夫していくこととしたい。

引用文献

- Fogel, A.D., Melson, G.F., & Mistry, J. (1986). Conceptualizing the determinants of Nurture: A reassessment of sex differences. In Fogel, A., & Melson, G.F. (Eds), *Origins of nurturance*. (pp.55-67.) Lawrence Erlbaum Associates.
- Fogel, A.D. & Melson, G.F. (1989). 子どもの養護性の発達. 小嶋秀夫 (編) *乳幼児の社会的世界* (pp.170-186). 有斐閣.
- 原ひろ子・館かおる (1991). *母性から次世代育成力へ：産み育てる社会のために*. 新曜社.
- 原田正文 (2007). *子育ての変貌と次世代育成支援：兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防*. 名古屋大学出版会.
- 伊藤葉子 (2004). 中・高校生の性別役割観と親性準備性との関連性の検討. *家庭教育研究所紀要*, 26, 5-13.
- 伊藤篤・塚本美由紀 (2015). 子育てひろばにおける青少年の養護性育成を目指した体験学習の意義. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 9, 57-71.
- 岩治まとか・井森澄江 (2008). 女子青年における「乳幼児期から現代までの親との関係」と「養護性」—回顧法による生育史の分析をもちいて—. *東京家政大学付属 臨床相談センター紀要*, 8, 19-35.
- 岩治まとか (2009). 大学生における養護性の検討. *東京家政大学研究紀要*, 49, 133-142.
- 川瀬隆千 (2010). 大学生の親準備性に関する研究. *宮崎公立大学人文学部紀要*, 17, 29-40.
- 小池優美 (2013). 青年期女性の親性準備性と就学前及び成人期の愛着スタイルとの関連. *日本女子大学大学院人間社会研究科紀要*, 19, 99-113.
- 小嶋秀夫 (1989). 養護性の発達とその意味. 小嶋秀夫 (編) *乳幼児の社会的世界* (pp.187-204). 有斐閣.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2015). 「第15回出生動向基本調査」http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp (最終アクセス：2018年8月16日)
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017). 「2017年版人口統計資料集」<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2017RE.asp?chap=0> (最終アクセス：2018年8月16日)
- 糊澤令子・福本俊・岩立志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurture) へ及ぼす影響. *教育心理学研究*, 57, 168-179.
- 糊澤令子 (2012). 子どもの養護性研究の現状と課題. *日本女子大学大学院人間社会研究科紀要*, 18, 85-93.
- 糊澤令子 (2012). *青年期・成人期における養護性の発達と形成要因*. 風間書房.
- 水口由紀子・中新美保子・井上信次 (2017). 青年期大学生の親準備性を育む要因の検討. *川崎医療福祉学会誌*, 27, 63-73.
- 中西由里・栗津幹子 (1996). 「養護性 (nurture)」に関する一研究. *椋山女学園大学研究論集*, 27, 9-18.
- 中西雪夫・牧野カツコ (1989). 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第3報). *日本家庭科教育学会誌*, 32, 61-65.
- 賛育子・中川名帆子 (2016). 母性看護学実習前後における女子大学生の親準備性の変化に関する実態調査. *ヒューマンケア研究学会誌*, 7, 55-61.
- 岡本祐子・古賀真紀子 (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析. *広島大学心理学研究*, 4, 159-172.
- 礪波朋子 (2012). 青年期の子どもイメージ. 育児イメージ及び養護性に関する研究. *京都光華女子大学研究紀要*, 50, 41-52.
- 佐々木綾子 (2007). 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討. *福井大学医学部研究雑誌*, 8, 41-50.
- 佐藤洋美 (2004). 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響. *日本生活体験学習学会誌*, 4, 35-54.
- 寺本妙子・柴原宜幸 (2015). 大学生の次世代育成意識と時間的展望の関連. *日本橋学館大学紀要*, 14, 15-23.

- 藤後悦子 (2007). 子どもへのナーチュランス (養護性) を育む発達教育プログラムが中学生の学校生活, 地域関係に与える効果. *保育学研究*, 45, 122-132.
- 山田節子 (1995). 保育教育における親準備性に関する実証的研究—女子中学生, 高校生, 短大生の場合—. *聖霊女子短期大学紀要*, 23, 16-33.

Change in Undergraduates' Nurturance Before and After Attending Lectures on Child Psychology

KANAMARU, Tomomi

The purpose of this study was to investigate the change of undergraduates' nurturance through the lecture of child psychology. Questionnaires about nurturance were conducted before (Time1 study: n=119) and after (Time2 study: n=108) the lectures. The results showed the following: (1) on the scoring of nurturance, although there was no significant sex difference, there were significant differences between undergraduates' departments before the lecture. (2) on the scoring of nurturance, although there was no significant difference between undergraduates' departments, there were significant sex differences after the lectures. (3) the scoring of the burden on child rearing, one of nurturance, was higher after than before the lectures. The implication of these results and the improvement of the lecture were discussed.